令和６年度　音楽科実践・研究計画

部　員	○大山　光子、中田　貴広

研究テーマ
「音楽のもと」を根拠とし、思いをもって音楽と豊かに関わる子どもを育む学び

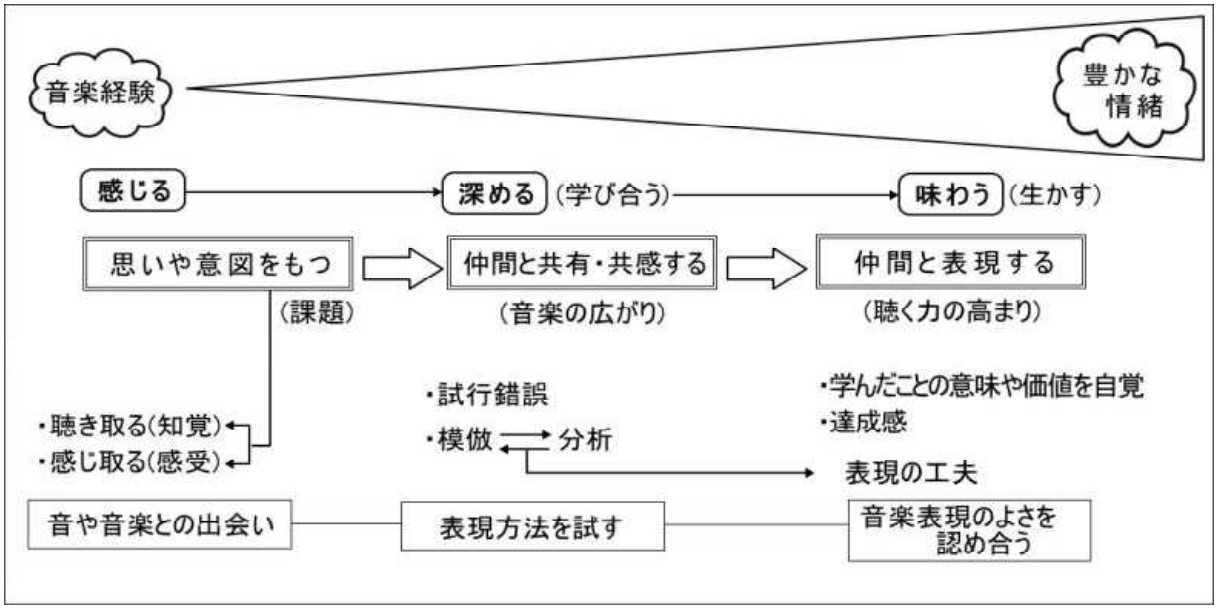
１　研究テーマについて

音楽科では、子どもたちが生涯にわたって音や音楽と豊かな関わりを築き、音楽を通じて生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを目指している。

音楽活動の醍醐味は、仲間と感動体験を共有できることである。言葉や文字では伝えることができない気持ちや、心と心がつながる感覚が、音楽を媒介にすることで伝わる。声や音、息を合わせることで体感できる一人では味わうことのできない心地よさや、音楽が人と自分をつないでくれるという安心感があるからこそ、私たちは音楽と関わり続けるのである。

昨年度の実践で、身近なモデルの存在が「学びのものさし」を自発的に働かせ、更新することに結び付くことが分かった。ゲストティーチャー（中学生）を招いたことで、モデルに近付こうとする気持ちの高まりによる表現力の向上が見られた。また、音楽の質を高める契機にもなった。一方で、よりよい表現にするため、表現の引き出しを増やしていく手立てが必要となってきた。そこで、仲間と表現する中で「音楽のもと」を根拠とし、試行錯誤しながらよりよい表現を目指していく子どもの姿を期待し、本テーマで実践を積み重ねていく。

音楽科で目指す自律した子どもの姿
・「音楽のもと」（音楽を形づくっている要素）に目を向けながら、自らの音楽表現をよりよいものにしようとする姿
・知覚と感受の両方を働かせて、思いをもって音楽に働きかける姿
・音楽活動を通して仲間と共有・共感するなど、人とのつながりを大切にする姿



図：音楽科　自律した学習者を育てる学習のプロセス

２　研究の重点　〈○は具体的な取組の例〉

試行錯誤ながら、よりよい表現を目指す子どもを支えるための学びのデザイン

○よりよい表現を目指し、表現力の向上につながるように、協働活動の中で自分にとってのモデルを見つけ表現に取り入れる場を設定する。
○心の通じ合いを感じながら、根拠をもって互いの音楽表現のよさを認め合うことができるように、「演奏者」「聴き手」になり、聴き合いながら助言し合える場を設定する。